

大垣市金生山化石館

化石館だより



コラム

山の貝拾い

今回は化石ではなく陸に生息する貝（陸産貝類）、いわゆるカタツムリの仲間のお話です。

6月は梅雨の季節です。雨が降りうとうしい日が続きますが、雨上がりに庭木や石垣を這うカタツムリに出会う機会も多くなります。カタツムリと言えば、ぐるぐる巻いた饅頭型の殻からぬめぬめした軟体を出し、先端部に目が付いた2本の大きな触角を振り回している姿をイメージされる方が多いと思います。このカタツムリですが、地域によって微妙に種類が異なっているのをご存知ですか。金生山化石館のある岐阜県大垣市付近でカタツムリと言えば主にイセノナミマイマイという種を指しますが、関東ではミスジマイマイ、関西ではクチベニマイマイであることが多いようです。実はカタツムリの仲間にはたくさんの種類があり、地域ごとに違った種類が生息しているのです。外形がよく似ていても殻の大きさや模様が異なったり、巻き方が異なったり、軟体に黒い筋があったりします。さらにカタツムリの仲間には、細長い殻をもつキセルガイや、殻口を蓋で被うヤマタニシなどその形が見た目でも大きく異なる種類があります。また直径が5cmもある大きなものから、わずか数mm程の小さな種類まであって実に多種多様なのです。カタツムリの仲間は陸産貝類といますが、日本には約800種もの陸産貝類が棲んでいるのです。



ミカドギセル（伊吹山系固有種）



イブキゴマガイ（径2mm：高さ4mm）

陸産貝類は移動能力が乏しいことから、限られた狭い範囲の中で生活しています。そのため狭い範囲内で交雑を繰り返しながら進化することとなり、結果として地域ごとに特徴のある多くの固有種が生まれます。そして中には特産と呼ばれる特定の地域にしか生息しない種も出現します。一般に陸産貝類は石灰岩地に多くの種類が生息しており、平地では種類が少なくなるのが普通です。

金生山は古くから陸産貝類の生息地としてよく知られているところです。そのため金生山には多くの陸産貝類の研究者や愛好家が訪れ採集を試みてきました。日本貝類学会の創設に尽力された黒田徳米博士もその一人ですが、1934年の学会誌に「山の貝拾ひ」と題した一文が掲載されています。その中で博士は金生山の豊富な陸貝について次のように述べています。

「・・・元来石灰岩地方は陸産貝類の産出が豊かであるとは一般に知られた事柄で例外は有るが先づ多くの場合その事は真実である。然るに赤坂はその例を余りにも濃厚に裏書きして居るもので、種類は量に於いても数に於いても豊饒であるのみならず、・・・境内の竹藪の中と云わず、石灰岩露頭は勿論；甚だしきに至っては柴草の刈り取られて日光の直射する松林下の路地に於いてさえ・・・若干のキセルガヒ、ゴマガヒ、マイマイ類等が生息して居るのを見るのである・・・」



カドバリニッポンマイマイ

金生山は黒田博士が驚かれるほど豊かな陸産貝類の生息地でした。しかし、近年は石灰岩の採掘が進み陸産貝類の生息できる場所が大幅に減少してしまいました。また宅地の造成に伴って林地が伐採されていますし、酸性雨の影響なども強くなってきているように思われます。そのためか、金生山でも陸産貝類の姿を見かけることが非常に少なくなってきました。現在、西濃陸産貝類研究会が大垣市教育委員会の委託を受けて、金生山とその周辺の陸産貝類について調査を実施しています。これまでの調査によって、生息数は随分少なくなっていますが、まだ多くの種類が生息していることが分かってきました。しかし、過去の調査には記録があるものの、全く確認できない種もあるようです。絶滅危惧種も多く生息している場所ですから、できるだけ今の環境が維持されていくことを願っています。

(文責：高木洋一)

お知らせ



前期 企画展

5月3日(木)より、「金生山の大理石と石細工」をテーマに、前期の企画展を開催します。

金生山からは、紅孔雀、更紗、五色、紅縞などと名付けられた、色彩や模様の豊かな大理石が産出します。この大理石を用いた石細工は江戸時代から行われていました。他では見られない金生山の色彩豊かな大理石とこれを用いた石細工の作品を是非ご覧ください。

これを用いた石細工の作品を是非ご覧ください。

- 期 間： 5月3日(木) ～ 9月3日(月)
場 所： 金生山化石館 2階展示室
入館料： 100円 高校生以下無料
休館日： 火曜日(祝日の翌日：その日が土・日の場合は月曜日)



問い合わせ： 大垣市金生山化石館 電話 (0584) 71-0950 (ファックスも同じ)
Email kasekikan@vanilla.ocn.ne.jp